



弁護士 河合弘之さん

父母のおかげで命拾い

父は京都大経済学部を出て、「一旗揚げてやる」と当時の満州（現中国東北部）に渡りました。旧満州国がつくれた電力会社に入り、日本軍の軍医の娘と結婚。私は三人目でやっと生まれた待望の男の子だったので、とてもかわいがられました。

戦中は恵まれた生活で、住宅には当時は非常に珍しかった冷蔵庫もあつたそうです。しかし、それは終戦で一変。父が家財道具を売つたり、近くの池でザリガニを捕つたりして、なんとか食いつないだ。旧ソ連が攻めてきたとき、に略奪に遭つたという話を聞きました。家を閉め切つて外出られず、太陽に当たらなければ、栄養不足だったり、かつたり、栄養不足だったりで私が一歳のころ、病気になつた。そのときも医者に行けず、O脚のように脚が曲がつた。私が小柄なのは、そのためだと思います。

乙以上は前に出ろ」と言われた。一定の体格以上の人のことです。ですが、父は嫌な予感がして

日本人の中には、寒くて食べ物もなく餓死したり、死ぬくらいなら、わが子を中国人に託したりする人もいた。それが中国残留孤児。死と隣り合わせの生活です。

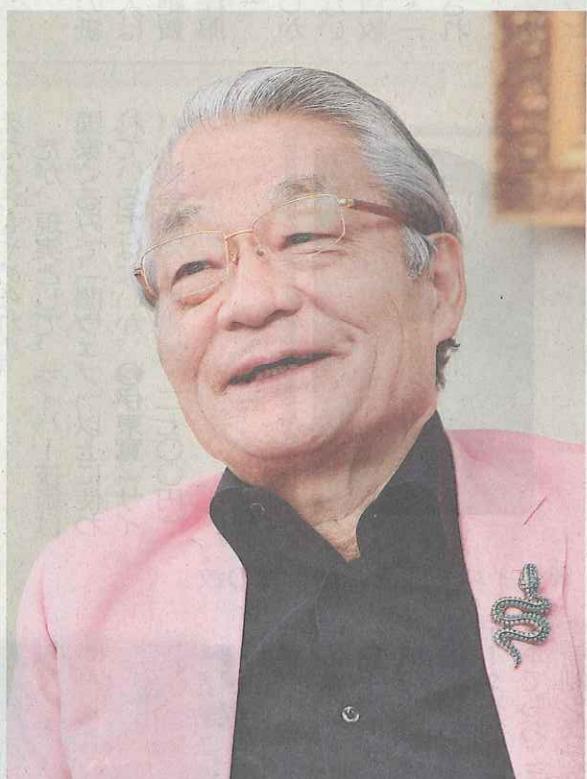
私は二回命拾いしています。一回目は終戦直前のころ。父たち大人の男が軍から公園に呼び出されて、「第一

もう一回は、終戦の一年後。日本への引き揚げです。二歳だった私は母に抱っこされていましたが、船が出る港

家族

く 健康
介護・シ
ア計
家育て
衣食住

生活 日 月火水木金土



かわい・ひろゆき 1944年、旧満州（現中国東北部）生まれ。東京大在学中に司法試験に合格。20年前から原発の運転差し止め訴訟に関わり、東日本大震災発生後に結成した「脱原発弁護団全国連絡会」の共同代表を務める。製作・監督した原発のドキュメンタリー映画「日本と再生」が東京で公開中。

までは大変な道のり。私たちは栄養失調になり、弟は途中で亡くなりました。「弘之は何が何でも生きて連れて帰る」と母が死ぬ氣で守つてくれました。ようやく日本の父の実家にたどり着き、医者に行くと「あと一日遅ければ死んでいた」と言われたそうです。

自分は幸運だった。自分は孤児になっていたかもしれません。という思いから、一九八四年に「中国残留孤児の国籍取得を支援する会」をつくり、約千二百五十人の日本国籍を取りました。

何か人のためになることを、という思いは常にあります。いま心血を注いでいる原発の運転差し止め訴訟は、人間にどうって最も根源的なこと。何かと考へてのことです。つまり、後世にいまの地球を残すこと、環境が一番大切だと思つてのこと。

父と母は、決して権力におもねらない人でした。権力が悪いことをしていたら、声を上げる。その考え方、私にも伝染していると思います。